

## 宗存版一切経ノート

小 山 正 文

### 一

わが国仏教における一切経の供給は、一千年以上の長きにわたって、もっぱら書写経と中国・朝鮮よりの輸入版経とにたよっていたが、天下がようやく静謐した江戸時代に入り前後三度におよぶ一切経の開版が行われたのであった。

その一は、いうまでもなく鉄眼（一六三〇―一八二）による有名な黄檗版で、彼は師隠元（一五九二―一六七三）が将来した明の万暦版一切経の覆刻を企て実に十一年もの歳月を費しついに延宝六（一六七八）年これを完成した。同版の版木は今もすべて宇治の黄檗山万福寺宝蔵院に現存し重要文化財の指定を受けるが、広く流布した黄檗版の仏教界に与えた影響は計り知れないものがあったといえよう。

一切経開版のその二は、これまた著名な天海（一五三六―一六四三）の寛永寺版である。周知のごとく天海は徳川家康（一五四二―一六一六）、同秀忠（一五七九―一六三二）、同家光（一六〇四―五一）にいたる將軍三代の絶

大なる帰依を得た傑僧であったから、一切経の開版も鉄眼のそれなどとは異り江戸幕府の強力な援助で行なうことができたが、それでも完成までに経局が寛永寺に設けられた寛永十四（一六三七）年より天海没後の慶安元（一六四八）年まで十二ヶ年を要している。しかし本版は印行部数の至って少ないものであったため、のちの鉄眼をしてあえて「計<sup>二</sup>此草版<sup>一</sup>支那有<sup>三</sup>二十余副<sup>一</sup> 独本邦未<sup>レ</sup>備非<sup>三</sup>国家之闕典<sup>一</sup>敷<sup>二</sup>」〔『進新刻大蔵経表』〕といわしめているが、ともかく日本最初の開版一切経としてその価値はすこぶる高く「倭蔵」の名を欲しいままなものとしている。なお天海版に使用された木活字や版木は現在も多数上野の寛永寺に伝存しており、京都西本願寺・長野開善寺各経蔵の天海版がその完本として有名である。

以上の鉄眼黄檗版・天海寛永寺版に加え今ひとつこれらに先立つ一切経開版のあった事実が、大正年間によく確認されるに至ったのが、ここで問題とする宗存の北野経王堂版にほかならない。同版については川瀬一馬氏のつぎのような解説が簡<sup>註1</sup>にして要を得た最新のものであるので、まずそれを引用させていただきついで宗存版の研究史を振り返っておこうと思う。

### 宗存版<sup>しづくおんばん</sup>

伊勢国山田の法楽院常明寺の宗存が伊勢大神宮に大蔵経奉獻の大願を立て、京都北野経王堂において慶長十八年（一六一三）に先ず大蔵目録（三帖）を活字開版し、以後寛永初年に至る十数年間にかんりの数を印行しているが、全部でどれだけ出しているか未詳である。なほ大蔵経以外の単刊本（『九重守』等）もあり、又、宗存に共力した「神力」の刊記の見えるものもあり、それにも北野経王堂常明寺神力と称している。すべて肉太

で特色のある字体の活字を使用している。

## 二

さて、宗存版が初めて人目に触れたのは、今よりちょうど七十年前の大正四年十一月に京都の真宗大谷大学（現大谷大学）で開催された第一回大蔵会の際であろう。<sup>註2</sup> そのとき妻木直良氏の所蔵する『大乘離文字普光明藏經』ほか四部合して一帖が出陳され、奥に「丁巳歳日本国大蔵都濫奉 勅雕造」とあった。翌五年十一月同じく京都の仏教大学（現龍谷大学）で行なわれた第二回大蔵会にも京都広隆寺蔵の宗存版十四点あまりが展示されたが、<sup>註3</sup> 當時はまだ認識不十分であつた。ところが大正九年十一月京都府立図書館で開かれた第六回大蔵会に<sup>註4</sup> 広隆寺より見出された慶長十八（一六一三）年正月の一切經に関する宗存勸進願文、および同年八月宗存印行の奈良東大寺図書館所蔵『大蔵目錄』三卷、その他個人所有の宗存版等全部で二十三帖が一挙に展観され宗存版一切經の存在が決定的存在となつたのである。そのときの展観目錄の解説を左に引用しておく。<sup>註5</sup>

○上記ノ經本ヲ開版セル事情ハ從來明瞭ナラザリシガ今回其願文ト目錄トヲ発シ其真相ヲ知ルヲ得タリ、即チ伊勢大神宮ニ關係淺カラザル常明寺ニ安置セン為メニ宗存ノ開版スル所ナリ、吾人ハ及ブ限リコレヲ集メタルモ尚ホ上記以外ニナシト云フベカラズ、大蔵經トシテハ誠ニ零本欠冊ニ過ギザルモ天海僧正ヨリ二十四年以前ニ活字版大蔵經ノ開版ヲ企テシ者アリシトハ何人モ意外トスル所ナルベシ、五行十七字ニシテ上記ニ從ヘバ慶長十八年ヨリ元和三年マデ五年間ニ開版スル所三十九部四十三卷アリ

宗存版一切経の存在が第六回大蔵会でこのように脚光をあびたのと時を同じくして、大正九年十一月禿氏祐祥氏はいち早く『六条学報』二二八に「高麗本を模倣せる活字版大蔵経に就て」と題する論文を発表し宗存版研究の基礎を築かれたのは注目しなければならない。

右論において禿氏は、広隆寺所蔵の願文ならびに東大寺図書館蔵の高麗版大蔵経目録より慶長十八年宗存に一切経開版計画のあった事実を明らかにし、その書目四十二部四十五巻のほか元和（一六一五）年の『神祇講式』、同三（一六一七）年の『顕戒論』や九重守に至るまでの遺品を列挙されたのは全く敬服のほかなく、さらに氏は『大蔵目録』開版の施主西田勝兵衛尉が寛永より寛文まで京寺町二条下ル妙満寺前にあった書肆であったことを『書賈便覧』より指摘し、宗存の住した常明寺は寛政九（一七九七）年刊行の『伊勢参宮名所図会』に出ていることまで明記するなど、今日からみても氏の論文は実にすぐれた内容のものと高く評価される。その後昭和七年二月に刊行された木宮泰彦氏の著書『日本古印刷文化史』では、禿氏が前の論文で「我国に勅版の大蔵経あるやうにも思はれぬ」といわれた宗存版の「大日本国大蔵都監奉 勅彫造」の語を取り上げ、「奉勅とある以上は、彼の大蔵経開版は後水尾天皇の勅命によったものと思はれるが、これに関する他の史料があるかどうかを知らぬ」と記されているのが注意される。この発言のちに和田萬吉氏、斎藤彦松氏の意見を導き出す端緒ともなった点で無視しがたいものをもつといえよう。昭和七年四月師子王円信氏は『叡山学報』五に「叡山版の研究」を発表、続いて同氏は同九年九月二十四日付の『中外日報』にも「大蔵会出陳の叡山版及び宗存版について（下）」を寄せ、宗存の常明寺が徧無為の名で知られる依田貞鎮の『伊勢三宮処々拝謁記』に出ている、彼は享保二十（一七三五）年にこ

こへ参拝したこと。そして文化九（一八一二）年の『異例寺院拔書』より、同寺が伊勢国度会郡山田にある高日山法楽院という天台寺院であったことを明らかにされ、明治初期に廃寺されたことをのべられた。昭和十二年十月川瀬一馬氏は名著『古活字版之研究』を世に送られたが、同書にも当然宗存版は取り上げられ、「何れも肉太にして大型なる活字を用ひ、其の刊行の実務には駿河版に従事した工匠台林等が関与してゐるものもある」と記し「又宗存の開版事業は、同じく天台宗なる関係上、叡山に於ける盛なる活字開版に刺戟せられたものであらう」と指摘され、彼の開版になる書目五十三点を列挙された。<sup>註7</sup>川瀬氏の大著と相前後する昭和十二年九月、生桑完明氏は『高田学報』十五に「高田山藏宗存版大藏經を紹介す」と題し真宗高田派京都別院所蔵の宗存版五十一部七十八巻を紹介された。右の中にはこれまで知られていなかった宗存版も多数あって、その書目数も一挙に八十点を越すという画期的大発見であった。翌十三年四月同じく『高田学報』二十に舟橋水哉氏が、宗存自身元和元（一六一五）年十一月に印行した『常明寺縁起』の写本（ただし大正八年の新しいもの）<sup>註8</sup>を入手し、これを「常明寺縁起に就て」と題し報告されたが、続いて翌十四年七月の『高田学報』二十二にも同氏は「再び異本常明寺縁起を紹介す」という題のもとに、前記の縁起とは全く内容の異なる常明寺縁起をやはり入手した旨を報告したのであった。宗存と関係深い常明寺の縁起が一度に二本も出現したのは喜ばしい限りであるが、残念ながら二本ともいまだ複製されていない。越えて昭和十六年八月、日下無倫氏は『日本仏教史学』の創刊号に「九重御守の流伝とその種々相」を発表され、宗存開版の九重守には三種の異版があるも、これが現存最古の開版本九重守としての価値は高く、伊勢参りの普及とともに宗存版九重守も各地に波及した事実を指摘されたのである。昭和十九年四月和田萬吉氏はその著

『古活字本研究資料』に東大図書館蔵の宗存版二帖を掲げ、例の奉勅刊記につきつぎのごとく述べられた。<sup>註9</sup>「但右刊記ハ高麗版ノ刊記ノ一部ヲ変ヘタルモノニテ奉勅彫造ノ語ハ現蔵経ニ当ラズ 大日本大蔵都監ノ語モ単ニ麗本所記ノ跋文ヲ襲用セルニ止リ官符ノ命ゼル職司ノ名ニ非ザルナリ」と。これは前の木宮泰彦氏の肯定説に対する否定説として注目されるが、そのへんの事情についてはつぎの斎藤彦松氏の研究をまって決着がつくまで、和田氏の説はきわめて有力であった。宗存版はその後も戦前戦後を通じ大蔵会にしばしば展覧されてきたが、昭和三十五年その当時大谷大学大学院生であった斎藤彦松氏が『同志社大学図書館学会紀要』三に画期的大論文「宗存版の研究」を発表され、かずかずの新事実を明らかにされたのであった。それらの諸点をいま箇条書に整理して列挙すれば、およそ以下のとおりとなろう。

一、宗存版の印行された場所は応永八（一四〇一）年に足利義満（一三五八—一四〇八）が建立した北野経王堂で、当時の経王堂は慶長十一（一六〇六）年八月に豊臣秀頼（一五九三—一六一五）が再建したばかりの真新らしい御堂であった。

一、宗存が天台沙門として過ごした伊勢の常明寺は、鎌倉時代の東大寺再興大勧進俊乗房重源（一一二一—一二〇六）が文治二（一一八六）年に『大般若経』の転読をおこない、建久四（一一九三）年には二部の『大般若経』写本を安置した常明寺と同じ寺で、宗存のころには後陽成院（一二七一—一二一七）の勅額<sup>註10</sup>があがっていた。

一、宗存版の刊行書目は全部で八十四部二百七十六巻で、その刊記形式に十一通りがあり年代順の変遷がみられる。<sup>註11</sup>

一、宗存版の装丁は折帖と袋綴本の二種類で、前者は蔵経、後者は蔵経中の『法苑珠林』と天台関係の典籍がそうした装釘法をとり、年代的に前者が古く後者が新らしい。

一、宗存版は慶長年間のもので一行十四字詰、一紙（張）二十二行の厚手黄紙であるのに対し、元和以降のものは一部を除きそれが十七字・二十三行となり、用紙も薄手の黄と白のものが混綴されるようになる。

一、袋綴本の宗存版には印刷様式に三種類があり綴じ方は五針眼の朝鮮綴であった。<sup>註12</sup>

一、比叡山慈眼堂の付属蔵に所蔵される木活字、版木、絵版木、組版用具、収納大箱等々は、従来天海版の品々といわれてきたが、実はそうではなく全部宗存版のものであることが明らかとなった。

一、宗存版に関係する人物として、神力・吉野入道意斎・西田勝兵衛尉・正直・台林・木村久助・玄作斎・茂助・助蔵・久保田の十名があげられる。

一、宗存版の『預修十王生七経』と『寿生経』は、前者の絵が慈眼堂蔵の絵版本に同じで、かつこの両経は建仁寺兩足院所蔵の朝鮮刊本と内容絵相がよく一致する点より、宗存は建仁寺に伝蔵されていた有名な高麗版一切経〔同寺百九十世永嵩が長禄二（一四五八）年に朝鮮より将来した蔵経。のち天保八（一八三七）年九月二十七日惜しくも焼失<sup>註13</sup>〕を底本として、自己の一切経刊行を企てたと考えられる。

一、宗存版における「奉勅彫造」の語は、慶長十九（一六一四）年から元和三（一六一七）年までの刊行物にかぎられ、それ前後のものには見られない事実より、元和三年に崩じた後陽成院と深い関係にある一語と考えられ、そのことは宗存の住した常明寺の額が同院の宸翰であったことも矛盾しない現象で、結局禿氏、木宮、和田三氏

の説は訂正を要する。

あらまし以上のようなことどもを明らかにされた斎藤氏の研究は、昭和三十九年十一月刊行の『大蔵経―成立と変遷―』<sup>註14</sup>につぎのごとく採用されており定説化したといってもよいであろう。

**宗存の北野経王堂版** 天台沙門法印聖乗坊宗存は、伊勢高日山常明寺の住僧であった。彼は慶長十八年（一六一三）正月に、伊勢神宮の内院常明寺に摺印一切経の奉納を発願し、京都の北野経王堂においてその事業に着手した。

その九月には、建仁寺の高麗藏経によって『大蔵目録』三帖を刊行しこれに発願文を収めた。その刊記には施主吉野入道意斎と西田勝兵衛の名をあげ、洛陽において出版した旨をのべている。これを出版予定の目録として、慶長十九年から經典の刊行に入るのである。その板式は、毎行十四字詰・二十三行、はじめの糊しろのところに経論名、巻数、枚数、千字番号を細字で刊記し、巻末に「（甲寅）歳大日本国大蔵都監奉勅彫造」と刊記がある。これは高麗再雕本の形式に倣うものである。ただ違うところは、整版でなく、文禄の役によって朝鮮から伝来した新しい技術の木活字を用い、一面五行の折帖に装幀した点である。

宗存の刻蔵事業は、慶長末から元和をへて寛永のはじめに至る前後十余年にわたるものであるが、元和四年以後の刊記には、「奉勅雕造」の文字が見えなくなり、刊行の仏典の種類も大蔵経から天台宗の章疏や一般書に変わってゆく。当時は後水尾天皇の御代であるが、後陽成上皇の在世であった。上皇は元和三年（一六一七）八月二



十六日、御年四十七歳で崩御となった。このことが刊記に「奉勅雕造」の文字が消える理由であろう。したがって宗存は後陽成上皇の勅を奉じてこの大藏經の出版をなしたものと推定される。

今日伝世する宗存版の遺本は各地にあり、それらあわせて八十五部二百八十四巻が知られる。まだまだ拾遺すべきものがある。元和四年以後は、顕戒論や天台三大部の科文などで、年号をもつ最後の刊記は寛永元年十一月十日の法苑珠林卷八十一である。<sup>註15</sup>その後この事業が杜絶したのは、宗存が示寂のためであろうと思う。

ところで昭和四十一年十一月、日光山輪王寺より長沢規矩也氏の編輯になる『日光山「天海藏」主要古書解題』が発行されたが、これによると従来東大寺にしか存しないと思われていた宗存版の『大藏目錄』三巻が輪王寺天海藏にもあることがわかるだけではなく、驚くべき新事実は同藏の室町時代刊本『金光明最勝王經』十巻（たゞし巻七は欠）の巻一・巻二・巻四・巻九・巻十の各巻紙背になんと宗存自筆の写經十八部および和歌六十七首等があって、前者写經の巻一には「慶長十七壬子十二月廿日夜二条御幸町逗留之時宗存書之」とあり、また巻四のそれには「山城国八幡宮一切經藏 借用 京洛二条写之」ともあり、巻十の後者には「元和五年己未九月時分常明寺宗存」の自署が見出されたことである。右の『金光明最勝王經』の紙背写經は全部で十八部ほどあるが、そのほとんどが後年宗存版に入れられているところよりすると、彼が底本に使用した高麗版は石清水八幡宮のそれであった可能性も出てきて興味深い。日光天海藏には右のほかなお元和三（一六一七）年の『顕戒論』、同七（一六二一）年の『妙法蓮華經「抄」』、『源信枕雙紙』、『法華經品釈』、『無量義經「卷釈」』、元和七年―寛永元（一六二四）年の『法

苑珠林』、元和九（一六二三）年の『天台四教儀』、元和四（一六一八）年の『正因果集』等々の宗存版があり、これらがみな天海その人の蔵品であってみれば、宗存と天海は同じ天台沙門としての交流があった事実を認めなければならず、そのことはあるいは途中で杜絶した宗存の一切経を天海がパトントッチして、かの寛永寺版一切経を完成させる結果になったのかも知れない。かかる点で日光天海蔵の宗存版は、まことに貴重な資料といえよう。<sup>註16</sup> 昭和四十四年四月是沢恭三・兜木正亨両氏の調査執筆になる奈良長谷寺の『豊山文庫善本聚録―古活本之部―』が同寺より発行されたが、豊山文庫にも叡山文庫、龍谷大学図書館、宮内庁書陵部同様、宗存版の『天台法華三大部科解』全六十六冊が秘蔵されていることを右の図書は伝えている。兜木氏は翌四十五年十月の『古文書研究』四に御架蔵の慶長十八（一六一三）年正月吉日の日付を有する宗存一切経開板勸進状（縦三センチ×横一〇六・五センチ）を新史料として紹介された。<sup>註17</sup> しかしこのことは氏自身気付かれなかったようであるが、右の『勸進状』なるものは、実は大正九年十一月の禿氏論文や『第六回大蔵会陳列目録』に早く掲載されている京都広隆寺所蔵のいわゆる宗存版『願文』と全く同内容のもので、したがってその史料価値はさほど高くはないけれども、本状の出現によって宗存が、やはり日本仏教古来からの伝統的系譜をひく勸進聖であったことを如実に示した点で、これは貴重な存在となるであろう。

以上が管見に入った宗存版に関する諸先覚の主要な研究足跡であるが、このほか宗存の住した伊勢常明寺に関する大治元（一一二六）年と仁平元（一一五二）年の文書が、『平安遺文』の第五巻と第六巻に出ていて同寺の歴史が相当古いことを物語り、また『国書総目録』の第四巻には、『常明寺縁起』、『常明寺勸進之状』、『常明寺御神

<sup>註18</sup>

事之作法』、『常明寺勅額沙汰文』、『常明寺別当職年中行事式』、『常明寺本堂尾部陵尾部社一切経蔵再興勸進帳』、『常明寺祐海勸進状』等々の常明寺関係史料が掲載されており今後注目していかねければならない。ちなみに常明寺は『勢陽雜記』によれば外宮一禰宜度会光忠が「是神官崇重寺也」というごとく元来度会氏の氏寺であつたことがわかり、このへんからも伝記の不明瞭な宗存をアプローチしていく必要がある。

### 三

宗存版の研究は如上のようにその歴史が浅いせいもあつてかきわめて不明瞭な部分が多く、特にわれわれの重大関心事である宗存の伝とその刊行書目点数が、いまだはっきりしないのはまことにもどかしい。彼の伝記については残念ながら筆者も諸先覚以上の史料を持合せないが、ただ刊行書目の方はその後若干管見に入つたものがあるので本誌を借りて公表しておきたいと思う。

宗存版の刊行書目は、すでにみたごとくまず禿氏祐祥氏によつて四十二部四十五卷と『願文』、『大蔵目錄』、『神祇講式』、『顯戒論』、九重守等々が列挙され、ついで川瀬一馬氏が計五十三部を掲載したが、これに相前後して生桑完明氏が新出資料五十一部七十八巻を紹介し一挙に宗存版は倍加の様相を呈することとなつた。これらの諸成果を踏まえて斎藤彦松氏がついに八十四部二百七十六巻の詳細な宗存版書目を完成したが、しかしなおその後の『大蔵経』成立と変遷<sup>註19</sup>」において「まだまだ拾遺すべきものがある」と指摘されている。そこで筆者もここ数年目にとまる宗存版を自分なりにノートしてきたら、およそ百点前後にも達することがわかつてきたが、なにぶんこれは

地方にあったの貧しい見聞<sup>註20</sup>に加え、特に宗存版は周知のごとくそれを多量に蔵していた江州金森善立寺、京都横尾平等心王院、真宗高田派京都別院のものすべてが現在寺外へ流出しているので、記載もれが多あるにちがいになく読者諸彦のさらなる御教示をえて、より完全な書目にしたいものと念じている。

註

- 1 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』 一九八二年十月 雄松堂書店 一四四ページ。
- 2 『大蔵会展観目録』 一九八一年十一月 文華堂書店 一四ページ。
- 3 同右 三六ページ。
- 4 同右 一一九ページ。
- 5 同右 一二一ページ。この解説はけだし禿氏祐祥氏の手になるものであろう。
- 6 木宮泰彦『日本古印刷文化史』 一九七五年五月 富山房 四三九ページ。
- 7 川瀬一馬『増補古活字版之研究』 一九六七年 A・B・A・J 二八三ページ。
- 8 『国書総目録』第四卷四九六ページによれば、これと内容の延宝八（一六八〇）年の写本が神宮文庫にも蔵せられていることが知られる。
- 9 和田萬吉『古活字本研究資料』 一九四四年四月 清閑舎 四六九ページ。
- 10 この勅額は天明八（一七八八）年石埼文雅が記せる『続郷談』（『大日本地誌大系』一参宮名所図会下―三〇四ページ）によれば、「両大神宮内院」と書かれていたが延宝二（一六七四）年に撤去されたとある。
- 11 十一通りは左のごとくである。

天 台 書 刊 行 期	大 藏 經 典 刊 行 期	書 種
	「勅雕造」刊記時代	造勅 期雕
11 10 9 8 7	No. 2 6 5 4 3	No. 1 形式 番号
<p>伊勢大神宮一切經本願常明寺宗存敬梓 寬永元年甲子十一月十一日</p> <p>天和八年壬戌十月二日甲子日 天台沙門常明寺宗存重刊</p> <p>伊勢大神宮內院一切經本願常明寺宗存敬梓 元和七年辛酉七月吉日</p> <p>經王堂常明寺神力令刊摺之畢 元和四年戊午二月中旬於西京北野</p> <p>北野經堂常明寺宗存令摺刊之畢 惟時元和三年丁巳曆八月中旬於西京</p>	<p>甲寅歲大日本國大藏都監奉 勅彫造</p> <p>乙卯歲大日本國大藏都監奉 勅彫造</p> <p>大日本國乙卯歲大藏都監奉 勅彫造</p> <p>伊勢大神宮常明寺高日山法樂院 元和元年乙卯十一月吉日法印宗存敬梓</p> <p>丁巳歲日本國大藏都監奉 勅彫造</p>	<p>一代藏經開梓摺寫報仏恩德 結緣衆生同証仏果二世安樂 乃至法界平等利益</p> <p>慶長十八年九月吉日 大日本願伊勢聖乘坊宗存(花押) 當施主開板 西田勝兵衛尉 吉野入道意斎</p>
<p>『法苑珠林』 卷八十一末</p> <p>『大悲心陀羅尼』 薩大千眼觀世音菩</p> <p>『源信枕雙紙』卷末</p> <p>『公說天地八陽神呪 經』卷末</p> <p>『顯戒論』卷下末 寫真④</p>	<p>寫真①②</p> <p>寫真⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒</p> <p>寫真⑳㉑㉒</p> <p>『神祇講式』卷末 寫真⑳㉑㉒</p>	<p>『大藏目錄』卷末</p> <p>上記刊記の事例</p>

12 その三種類はつぎのとおりであるが、斎藤氏はその他として今ひとつを付加えておられる。

a 『顕戒論』、『正因果集』にみられる匡郭下方双辺三方单辺、十七字十行のもの。

b 『天台法華三大部科解』の匡郭下方单辺、十七字十行、上欄（棚）ありて頭注をも印刷するもの。

c 『法苑珠林』の四周单辺、十七字十行のもの。

その他、源信の『枕雙紙』にみられるcと同じ四周单辺ながら十字十行のものがある。

13 宗存版の底本については後述のごとく石清水八幡宮の一切経を使用した可能性の方が高いであろう。

14 大藏会編『大藏経―成立と変遷―』一九六四年十一月 百華苑 九六ページ。

15 最後の刊記は『法苑珠林』巻百の寛永元（一六二四）年十二月二十七日と訂正すべきであろう。

16 ちなみにいう。名古屋市蓬左文庫の宗存版五点九帖は、尾張徳川家初代藩主徳川義直（一六〇〇―一五〇）の蔵書であったことを示す「御本」印が押されているが、元来それは父家康旧蔵のいわゆる「駿河御譲本」であつたらしい。とすればここに宗存―天海―徳川家の関係も考えられて興味深いものがある。なお、竜谷大学図書館蔵の『法華玄義科文』一之一の見返しに「前大僧天海寄進」という墨書があるのもこのさい注意する必要がある。

17 本状の見返し端裏に異筆で「江戸□□寺天海和尚慈眼大師御筆」とあるのも前註と合せ注目したい。

18 その文書をつぎに掲げておく。

『平安遺文』第五卷二〇七一

謹辞 定永地沽渡進治田立券文事

合元式段内五分壹町者

在繼橋郷下津山里卅五坪内

直捌丈絹壹疋請納了 同（花押）

右 件治田元者 従山安清之手 相副次第文書等 所買得也 而依有直物急用

定件直 於度会寿一子所沽渡如件 仍為後代 注子細立券文已畢 以辞

大治元年五月十五日

常明寺所司僧（花押）

『平安遺文』第六卷二七四三

定永地相博渡畠地壹段事

在百八十步者 山田村曾瀬北畠<sup>光重</sup> 百八十步 同村武則居住畠替地壹段 在箕曲郷宇上辺畠

右件畠地 依便宜 相副次第。<sup>手継文</sup>文書等於敢棄子所相伝渡也。<sup>但於上分妻者付上辺畠可免済也</sup>仍為後代 替文如件

仁平元年十二月十一日

常明寺別当(花押)

19

げんに齋藤録が八十四部であるのに対し本書が八十五部としているのは、その九十四ページに写真が掲載されている『大唐西域求法高僧伝』を加えているからであろう。なお齋藤彦松氏は神戸市高木文庫旧蔵の『四部録』(二十五之五)一冊が宗存版活字に全同するが今後の研究にまたねばならないとされる。よって今回の目録にも入れなかったことを付記しておく。特に残念でなかったのは宗存版をすくなくらず所有していたと想像される安田文庫、高木文庫、禿氏祐祥氏、内藤湖南氏、松本文三郎氏、妻木直良氏、フランク・ホーレー氏、小汀利得氏、反町茂雄氏等々の目録を披見できなかったことである。

(60・8・23)

20

〔付記〕常明寺の資料に関し保坂三郎「芦屋釜私考(上)」(『國華』六四―一一)三四八ページによれば大津市渡辺家に「伊勢山田常明寺香炉永正三年八月日大工葺屋行信」の銘をもつ永正三(一五〇六)年の常明寺旧蔵鉄香炉(今香炉釜に改作)が存在することをその後知った。

また『伊勢参宮名所図会』には明治の廃仏毀釈で失われる以前の常明寺境内が常明院の名のもとに画かれているのも貴重といえよう。なお、常明寺関係史料のところに列挙した『一切経蔵再興勸進帳』の経蔵には一体いかなる蔵経が収納されていたのであろうか。ことによるとそれは宗存版であったということも考えられて気がかりとなる。

宗存版一切経目録稿

凡 例

- 一、書目は五十音順とし、〳仏説〳や〳高僧〳を省いた。※仏説無量寿経↓無量寿経 高僧法顯伝↓法顯伝
- 一、帖数は原物が完存している場合のみ記した。数部の経典が一帖となっているものは〳合〳とした。
- 一、高麗蔵版一切経に収載されているものは〳有〳と示した。
- 一、禿氏録は禿氏祐祥氏の「高麗本を模倣せる活字版大蔵経に就て」(『六条学報』二二八・大正九年十一月)に掲載されている宗存版の書目。この論文はのち『<sup>総合</sup>大学仏教史学論叢』(昭和十四年十二月 富山房)に所収。
- 一、川瀬録は川瀬一馬氏の『古活字版之研究』(昭和十二年十月 安田文庫刊)に掲載の書目。
- 一、生桑録は生桑完明氏の「高田山蔵宗存版大蔵経を紹介す」(『高田学報』一五・昭和十二年九月)によるもの。
- 一、斎藤録は斎藤彦松氏の「宗存版の研究」(『同志社大学図書館学会紀要』三・昭和三十五年)に掲載されている書目の№をそれぞれ示す。
- 一、所蔵の某氏は所有者名を特定できない場合に用いたが、その多くは現在所在不詳とみるのが至当であろう。
- 一、高田山専修寺京都別院のものについては竜谷大学教授平松令三氏より貴重な旧蔵写真を拝借することができた。記して謝意を表す。
- 一、備考欄は主として所蔵の典拠を明らかにする文献を掲げた。
- 一、写真はすべて安城市本證寺所蔵の分で、その掲載順序は目録とは無関係に甲寅歳、乙卯歳、無刊記、丁巳歳の順とした。
- 一、写真撮影は同朋学園仏教文化研究所研究員渡邊信和氏の手を煩した。心より厚く御礼申し上げる。



番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	蔵高麗	録秀氏	録川瀬	録生桑	録齋藤	所蔵	備考
1	阿吒婆拘鬼神大將上仏陀羅尼神呪経	一 一				有	○	○	○	48	某氏 京都別院 安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.60 二部のうち一部現在所在不明 写真⑦ 京都別院旧蔵 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある 写真②⑨ 京都別院旧蔵
2	阿毘曇五法行経	一 一	元和元	乙卯	一六二五	有			○	28	安城市本證寺	写真②⑨ 京都別院旧蔵 『第六十八回大藏会展観目録』P.2 『大藏会展観目録』P.616の元和十二（一六二六）年は元和三（一六一七）年の誤り 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある 写真③⑤ 58・108と合一帖 高田山内最勝園吉祥寺寂照院の墨者より京都別院旧蔵と推定 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある 30の前後表紙裏貼に使用されているところよりかつて存在したことが知られる 『大藏会展観目録』P.120 兜木家に本状の写本があること 『古文書研究』四に紹介されている 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本があるのでその刊行が推定される
3	阿弥陀鼓音声王陀羅尼経	一 一	元和三	丁巳	一六一七	有					竜谷大学 図書館	
4	安宅神呪経	一 合				有					安城市本證寺	
5	一切経音義	百	慶長十九	甲寅	一六二四	有						
6	一切経開板勧進状（願文）	一 一	慶長十八	癸丑	一六二三		○		○	1	京都市広隆寺	
7	一切如来金剛壽命陀羅尼経	一				有						
8	一百五十讃仏頌	一	元和元	乙卯	一六二五	有			○	30	安城市本證寺	写真③ 京都別院旧蔵
9	右繞仏塔功德経	一	慶長十九	甲寅	一六二四	有			○	10	安城市本證寺	写真⑨ 京都別院旧蔵
10	有徳女所問大乘経	一	慶長十九	甲寅	一六二四	有				70	某氏	『大藏会展観目録』P.120
11	延命地藏菩薩経	一				有	○	○		81	某氏	『大藏会展観目録』P.120
12	迦葉結経	一	元和元	乙卯	一六二五	有	○		○	31	安城市本證寺	写真⑨ 京都別院旧蔵
13	迦葉赴仏般涅槃経	一 一	元和三	丁巳	一六一七	有	○	○	○	39	安城市本證寺 東京大学 図書館	和田万吉『古活字本研究資料』P.58 江州金森善立寺の印および西福寺恵空子の墨書あり 写真③⑧ 京都別院旧蔵

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗	禿氏	川瀬	生榮	所蔵	備考
14	月光童子経	一一	元和三	丁巳	一六七	有	〇	〇	〇	某氏 京都別院	『大蔵会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.57 現在所在不明
15	観音賢菩薩行法経	一一				有				写真②③ 京都別院旧蔵	
16	勸発諸王要偈	一一	元和元	乙卯	一六五	有	〇	〇	〇	大谷大学 図書館 安城市本證寺	写真②④ 三丹文庫舟橋水哉師旧蔵 『高田学報』二十 P.57 『大谷大学図書館善本聚英』P.34 写真②④ 京都別院旧蔵
17	経律異相	五				有	〇	〇		京都別院	『高田学報』十五P.59 別院旧蔵の二十帖は現在所在不明 写真③④⑤ 窮源蔵の黒印あり 『小林書房新収古書目録集速報』五十P.7 『大蔵会展観目録』P.348 『日光山「天海蔵」主要古書解題』P.285 『日光山「天海蔵」主要古書解題』P.52 奉納東照三所大権現大僧正天海の墨書あり 『日光山「天海蔵」主要古書解題』P.53 『昭和現存天台書籍綜合目録』上P.344 『国書総目録』三P.96 谷村文庫 『大東急記念文庫貴重書解題』二P.181 下巻のみの一冊 山門観明院蔵本の黒印あり 稲田福堂 久原文庫旧蔵 川瀬一馬「古活字版之研究」P.285 叡山真如蔵旧蔵なれど現在所在不明 元和三(一六六七)年実祐の墨書あり 『弘文莊待賈古書目録』二八(昭和三十七年)P.48 『古典籍展観大入札目録』(昭和三十七年)P.15 『弘文莊古版本目録』(昭和四十九年)P.226 『古活字本研究資料』P.110(二冊のみ)にそれぞれ出ているが現在不明 写真⑤ 京都別院旧蔵
18	頸戒論	三三	元和三	丁巳	一六七		〇	〇		神戸市高木文庫 大東急記念文庫 京都大学図書館 京都大学図書館 日中市輪王寺 京都市曼殊院 京都市輪王寺	『大蔵会展観目録』P.120 『高田学報』二十P.57 三丹文庫舟橋水哉師旧蔵
19	堅固女経	一一				有	〇	〇	〇	京都市本證寺 安城市本證寺	『大蔵会展観目録』P.86 P.120 『高田学報』二十P.57 三丹文庫舟橋水哉師旧蔵
20	玄師殿陀所説神呪経	一一	元和三	丁巳	一六七	有	〇	〇	44	大谷大学 図書館	

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	藏	所蔵	備考
21	高僧伝	十四	慶長十九	甲寅	一六四	有	名古屋市 真福寺	『真福寺善本目録』P. 48 経藏寄付の墨書あり 『高田学報』十五P. 60 現在所在不明 真福寺・別院とも巻一・二・三・五・六の五帖のみであるから他巻は未刊か
22	九重守	一					大谷大学 図書館か 金沢市近弥二郎氏 寛谷大学図書館か 愛知県 浅井鋈一氏 大谷大学 図書館か 大谷大学 図書館か 神戸市 高木文庫	『日本仏教史学』一P. 72 楠邱文庫日下無倫師旧蔵 刊記に神力の名あり 『大藏会展観目録』P. 434 『日本仏教史学』一P. 74 『日本仏教史学』一P. 74 『日本仏教史学』一P. 76 現在所在不明 『日本仏教史学』一P. 77 楠邱文庫日下無倫師旧蔵 『日本仏教史学』一P. 78 楠邱文庫日下無倫師旧蔵 川瀬一馬「古活字版之研究」P. 285 現在所在不明 本書を宗存版とすることには若干疑念がある
23	五味禅						京都別院	『高田学報』十五P. 60 寿量品第二 現在所在不明
24	金光明経	四					安城市本證寺	写真⑩ 巻二「特選総合古書在庫目録」二P. 91
25	三慧経	一	元和元	乙卯	一六二五	有	京都別院	写真⑪『高田学報』十五P. 59 現在所在不明
26	讃観世音菩薩頌	一	元和元	乙卯	一六二五	有	安城市本證寺	写真⑫『大藏会展観目録』P. 36
27	師子莊嚴王菩薩請問経	一	慶長十九	甲寅	一六四	有	京都市広隆寺	写真⑬『大藏会展観目録』P. 37
28	四品学法経	一	元和元	乙卯	一六二五	有	京都別院	『高田学報』十五P. 58 現在所在不明 『還暦記念日下教授所蔵図書展観目録』P. 8 楠邱文庫日下無倫師旧蔵
29	舍衛国王夢見十事経	一	元和元	乙卯	一六二五	有	某氏 安城市本證寺	『大藏会展観目録』P. 120 写真⑭ 京都別院旧蔵

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗	所蔵	備考
30	寂照神變三摩地経	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有	安城市本證寺	写真⑧ 京都別院旧蔵
31	思惟略要法	一一	元和元	乙卯	一六五	有	京都別院	『高田学報』十五P.59 現在所在不明 昭和五十七年に春和堂伏見店が市場へ出す
32	十二遊経	一一	元和元	乙卯	一六五	有	某氏	『大蔵会展観目録』P.120
33	呪齒経	一合				有	京都別院	『高田学報』十五P.58 34・37・38・69・78・93と合帖 現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
34	呪時気病経	一合				有	京都別院	『高田学報』十五P.58 33・37・38・69・78・93と合帖 現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
35	受持七仏名号所生功德経	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有	某氏	『大蔵会展観目録』P.120
36	寿生経	一一				〇	京都市広隆寺	『大蔵会展観目録』P.37 大展録の刊記は乙卯 川瀬録は丁巳となっているが禿氏録に照し無刊記とするのが正しい 本経の底本は京都市建仁寺両足院蔵の朝鮮刊本の齋藤説あり
37	呪小兒経	一合				〇	京都別院	『高田学報』十五P.58 33・34・38・69・78・93と合帖 現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
38	呪目経	一合				有	京都別院	『高田学報』十五P.58 33・34・37・69・78・93と合帖 現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
39	正因果集	三一	元和四	戊午	一六八		叡山文庫 日光市輪王寺 東京大学図書館	川瀬一馬「古活字版之研究」P.285 『日光山「天海蔵」主要古書解題」P.56 和田万吉「古活字本研究資料」P.214 『大蔵会展観目録』P.120
40	商主天子所問経	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有	某氏	『大蔵会展観目録』P.120

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗 禿氏 川瀬 生桑 齋藤	所蔵	備考
41	清浄観世音普賢陀羅尼經	一	元和三	丁巳	一六七	〇	某氏 京都別院	『大藏会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.58 現在所在不明
42	小道地經	一	元和元	乙卯	一六五	〇	安城市本證寺	写真②① 京都別院旧蔵 本書の刊本は現存しないが写本が神宮文庫と豊橋市蓮泉寺三舟文庫にあることが『国書総目録』四P.496と『高田学報』二十P.58より知られる
43	常明寺縁起	一	元和元	乙卯	一六五			『高田学報』二十P.57 三舟文庫舟橋水哉師旧蔵
44	諸仏心陀羅尼經	一	元和三	丁巳	一六七	〇	大谷大学図書館	写真①① 京都別院旧蔵
45	諸法最上王經	一	慶長十九	甲寅	一六四	〇	安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』P.145
46	神祇講式	一	元和元	乙卯	一六五	〇	某氏	日光市輪王寺に慶長十七(一六二二)年の宗存の写本があるのでその刊行が推定される
47	辰狐王菩薩一字秘密速成就戒經	一					某氏 京都別院	『大藏会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.57 現在所在不明
48	申日兒本經	一	元和三	丁巳	一六七	〇	某氏 京都別院	『大藏会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.57 現在所在不明
49	近童子經	一	元和三	丁巳	一六七	〇	某氏 京都別院	『大藏会展観目録』P.120 『高田学報』十五P.57 現在所在不明
50	撰集三藏及雜傳	一	元和元	乙卯	一六五	〇	竜谷大学図書館	『大藏会展観目録』P.120・P.616 『大藏会展観目録』P.432・P.549 犀絵・挿絵あり 金剛子弁海の墨書がある
51	千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼經	一	元和八	壬戌	一六三	〇	獅子王円信氏	『大藏会展観目録』P.432・P.549 犀絵・挿絵あり 金剛子弁海の墨書がある
52	善惡因果經	一						日光市輪王寺に慶長十七(一六二二)年の宗存の写本があるのでその刊行が推定される
53	禪要經	一					京都市広隆寺 京都別院	『大藏会展観目録』P.37 『高田学報』十五P.59 現在所在不明 川瀬録の刊記は乙卯となっているが無刊記が正しい
54	象頭精舎經	一	元和三	丁巳	一六七	〇	安城市本證寺 国文学研究資料館か	写真⑦ 京都別院旧蔵 『玉英堂稀観本書目』百五十P.46 平等心王院の朱印あり 『大藏会展観目録』P.120はこれに同じか
55	蘇悉地羯羅供養法	三三三	慶長十九	甲寅	一六四	〇	安城市本證寺	写真②①④ 平等心王院の朱印あり 『大藏会展観目録』P.120はこれと同じか

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗	所蔵	備考
56	大意経	一	慶長十九	甲寅	一六二四	有	安城市本證寺 大谷大学 図書館	写真⑩ 京都別院旧蔵 『還暦記念日下教授所蔵圖書展観目録』P. 8 楠邱文庫日下無倫師旧蔵
57	大荒神施与福德門満陀羅尼経	一	元和六	庚申	一六二〇		慶応義塾 図書館	『慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題』P. 141 慈眼寺兎弁の名あり 幸田文庫本
58	大七宝陀羅尼経	一合				有	安城市本證寺	写真⑫ 4・108と合一帖 高田山内最勝園吉祥寺寂照院 の墨書より京都別院旧蔵と推定 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
59	大乘伽耶山頂経	一一	元和三	丁巳	一六二七	有	花園大学 図書館 京都別院	『大蔵会展観目録』P. 599 今津文庫今津洪嶽師旧蔵 『大蔵会展観目録』P. 120と同本か 『高田学報』十五P. 57 現在所在不明
60	大乘離文字普光明蔵経	一一	元和三	丁巳	一六二七	有	和歌山本勝寺か 某氏 東洋文庫 安城市本證寺	『大蔵会展観目録』P. 14 本勝寺は妻木直良師の自坊 『大蔵会展観目録』P. 120 『岩崎文庫和漢書目録』P. 43 写真⑬ 京都別院旧蔵
61	大乘流転諸有経	一一	慶長十九	甲寅	一六二四	有	京都市広隆寺 京都市本證寺	『大蔵会展観目録』P. 36
62	大蔵目録	三三 一一	慶長十八	癸丑	一六二三	有	東大寺図書館 京都市建仁寺 日光市輪王寺 名古屋市 蓮左文庫 名古屋市 連左文庫 御本印あり 刊記なし	『大蔵会展観目録』P. 120・P. 261・P. 385・P. 616 『大蔵会展観目録』P. 385 刊記欠 『日光山「天海蔵」主要古書解題』P. 48 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』P. 106 卷上・中のみ 駿河御譲本 御本印あり 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』P. 106 駿河御譲本 御本印あり 日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある
63	大唐西域求法高僧伝	二二	慶長十九	甲寅	一六二四	有	竜谷大学図書館か 名古屋市蓬左文庫	『大蔵経―成立と変遷―』P. 94 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』P. 105

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗	禿氏	川瀬	生桑	京藤	所蔵	備考
64	大般涅槃經	罕	慶長十九	甲寅	一六四	有					某氏	『弘文莊待買古書目録』二十八P.40 卷第七 平等心王院の印あり
65	提婆菩薩傳	一一	元和元	乙卯	一六五	有			○		安城市本證寺	写真⑮ 京都別院旧蔵
66	大般若波羅密多經	百六				有						宗存版の『大般若經』については『古文書研究』四P.113にも述べられており、げんに昭和六十年第五回古書籍・書画幅大即売会の『出品目録抄』P.45に巻第四百二のそれが出たが疑念の余地がある
67	大普賢陀羅尼經	一				有						日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある。その刊行が推定される
68	大方広菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼法	一										日光市輪王寺に慶長十七（一六二二）年の宗存の写本がある。その刊行が推定される
69	檀特摩油述經	一合				有			○		京都別院	『日光山「天海藏」主要古書解題』P.55 法印弁海の墨書あり 現在所在不明 刊記に神力の名あり
70	天台四教儀	一一	元和九	癸亥	一六三						日光市輪王寺	『大藏會展観目録』P.37・P.120 『玉英堂稀観本書目』P.55十P.45 京都別院旧蔵
71	天地八陽神呪經	一一	元和四	戊午	一六八	有					京都市広隆寺	『大藏會展観目録』P.37・P.120 『玉英堂稀観本書目』P.55十P.45 京都別院旧蔵
72	徳護長者經	二二	元和三	丁巳	一六七	有			○		国文学資料館か	『大藏會展観目録』P.37 『高田学報』十五P.59 現在所在不明
73	内身観章句經	一一	元和元	乙卯	一六五	有			○		京都別院	写真⑮ 京都別院旧蔵
74	如意虚空藏菩薩陀羅尼經	一一							○		安城市本證寺	『大藏會展観目録』P.260 二十七代有滲寄進の墨書あり 写真① 江州金森善立寺の朱印および京都市西福寺恵空叟の墨書と炳卿珍蔵旧聚古鈔之記（内藤湖南）ならびに宝玲文庫（フランク・ホーレー）の旧蔵印あり 下巻のみ
75	破邪論	二二	慶長十九	甲寅	一六四	有					安城市本證寺	『大英堂展観目録』P.120 『玉英堂稀観本書目』P.55十P.43 京都別院旧蔵
76	般泥洹後灌臘經	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有			○		某氏 京都市本證寺	『高田学報』十五P.58 二部のうちの一が現在所在不明

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗 藏 錄	秀氏 藏 錄	川瀬 藏 錄	生桑 藏 錄	齋藤 藏 錄	所 藏	備 考
77	般若心経秘鍵	一一					○				某氏	『大藏会展観目録』P.120 『国書総目録』六 P.710に元和(一六二一)の刊本が出ているが別物と思われる 『高田学報』十五P.58 33・34・37・38・69・93と合帖 現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七(一六二二)年の宗存の写本がある
78	辟除賊害呪経	一合				有		○			京都別院	『大藏会展観目録』P.36 『還暦記念日下教授所蔵国書展観目録』P.8 楠邸文庫 日下無倫師旧蔵
79	不増不减経	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有	○	○			京都市広隆寺 大谷大学 図書館か 竜谷大学 図書館	『大藏会展観目録』P.36 『還暦記念日下教授所蔵国書展観目録』P.8 楠邸文庫 日下無倫師旧蔵 『第六十八回大藏会展観目録』P.1 秀氏文庫 師旧蔵 江州金森善立寺の印および恵空子の墨書あり 和印および西福寺恵空子の墨書あり 朱印および西福寺恵空子の墨書あり 『高田学報』十五P.58 『古典籍下見展観大入札会目録』(昭和五十七年)P.5がこれに当る 現在所在不明
80	仏治身経	一一	元和三	丁巳	一六七						東京大学 図書館	『昭和現存天台書籍綜合目録』下P.1231 『大藏会展観目録』P.349・P.503・P.549 『和漢書分類目録』P.257 補写あり 『成賢堂善本書目』P.237 成賢堂文庫 『大東急記念文庫貴重書展覧』二P.181 卷六・卷四十三の二冊のみ 稲田福堂旧蔵
81	仏臨涅槃記法住経	一一	慶長十九	甲寅	一六四	有	○	○			京都別院 図書館	『昭和現存天台書籍綜合目録』下P.1231 『大藏会展観目録』P.349・P.503・P.549 『和漢書分類目録』P.257 補写あり 『成賢堂善本書目』P.237 成賢堂文庫 『大東急記念文庫貴重書展覧』二P.181 卷六・卷四十三の二冊のみ 稲田福堂旧蔵
82	付法蔵因縁伝	六六	元和三	丁巳	一六七	有		○			叡山文庫	『昭和現存天台書籍綜合目録』下P.1231 『大藏会展観目録』P.349・P.503・P.549 『和漢書分類目録』P.257 補写あり 『成賢堂善本書目』P.237 成賢堂文庫 『大東急記念文庫貴重書展覧』二P.181 卷六・卷四十三の二冊のみ 稲田福堂旧蔵
83	法苑珠林	百百	元和七 寛永元	辛酉 甲子	一六二 一六四	有		○			京都市広隆寺 安城市本證寺 京都市広隆寺 京都市広隆寺 大谷大学 図書館か 京都別院	『大藏会展観目録』P.36 『還暦記念日下教授所蔵国書展観目録』P.8 楠邸文庫 日下無倫師旧蔵 『高田学報』十五P.58 現在所在不明
84	法観経	一一	元和元	乙卯	一六五	有	○	○			京都市広隆寺 安城市本證寺 京都市広隆寺 京都市広隆寺 大谷大学 図書館か 京都別院	『大藏会展観目録』P.36 『還暦記念日下教授所蔵国書展観目録』P.8 楠邸文庫 日下無倫師旧蔵 『高田学報』十五P.58 現在所在不明
85	菩薩訶色欲法経	一一	元和元	乙卯	一六五	有	○	○			京都市広隆寺 安城市本證寺 京都市広隆寺 京都市広隆寺 大谷大学 図書館か 京都別院	『大藏会展観目録』P.36 『還暦記念日下教授所蔵国書展観目録』P.8 楠邸文庫 日下無倫師旧蔵 『高田学報』十五P.58 現在所在不明



番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗 禿氏 川瀬 生桑 齋藤	所蔵	備考
86	法華經品釈	一一	元和七 辛酉	一六二二			大津市美蔵坊真如藏 日光市輪王寺 種本八部を蔵す	『昭和現存天台書籍綜合目録』上 P. 279 『日光山「天海藏」主要古書解題』P. 53 輪王寺には同種本八部を蔵す
87	法華玄義科文	十七	元和三 丁巳 一六二七 元和四 戊午 一六二八	一六二七 一六二八			宮内庁書陵部 竜谷大学図書館 桜井市長谷寺 某氏	『大藏会展観目録』P. 348・P. 549 『昭和現存天台書籍綜合目録』上 P. 28 『和漢書分類目録』P. 330 『竜谷大学図書館善本目録』P. 82 『豊山文庫善本聚録―古活字本之部―』P. 6 『古典籍展観大入札会目録』(昭和三十七年) P. 15 現在所在不明 刊記に神力の名もある
88	法華文句科解	十五	元和三 丁巳 一六二七 元和四 戊午 一六二八	一六二七 一六二八			宮内庁書陵部 竜谷大学図書館 桜井市長谷寺 花園大学 図書館 某氏	『大藏会展観目録』P. 348・P. 549 『昭和現存天台書籍綜合目録』上 P. 37 『和漢書分類目録』P. 330 『竜谷大学図書館善本目録』P. 82 『豊山文庫善本聚録―古活字本之部―』P. 7 『大藏会展観目録』P. 602 今津文庫今津洪巖師旧蔵 大覚寺住物の黒印 春翠文庫の朱印あり 『古典籍展観大入札会目録』(昭和三十七年) P. 15 大本はこれに当るか 刊記に神力の名もある
89	法顯伝	一一					名古屋市真福寺 名古屋市蓬左文庫 某氏	『真福寺善本目録』P. 48 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』P. 105 両本の刊記に丙午歳高麗国大藏都監奉勅彫造とあるため前者は高麗版とするが後者は宗存版とみる
90	梵網經菩薩戒序	一一					安城市本證寺 某氏	『大藏会展観目録』P. 120 写真 <sup>26</sup> 京都別院旧蔵
91	摩訶止観科解	十五	元和三 丁巳 一六二七				宮内庁書陵部 竜谷大学図書館	『大藏会展観目録』P. 348・P. 549 『昭和現存天台書籍綜合目録』上 P. 46 『和漢書分類目録』P. 330 『竜谷大学図書館善本目録』P. 82 四之一のみ別本

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	蔵	所蔵	備考
91	摩訶止観科解	十 一	元和三 丁巳 一六二七				桜井市長谷寺 某氏 安城市本證寺 竜谷大学 図書館	『豊山文庫善本聚録—古活字本の一部—』P. 4 『古典籍展観大入札会目録』(昭和三十七年)P. 15 現在所在不明 本證寺本・竜大本はこれに当るか 写真④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ と僚巻 大覚寺住物の黒印 春翠文庫 欣魚莊文庫の朱印あり 卷第十のみ 88の花大本・91の本證寺と僚巻 春翠文庫の朱印あり『第六十八回大蔵会展観目録』P. 14
92	枕雙紙	一 一	元和七 辛酉 一六二二				東洋文庫 日光市輪王寺	川瀬一馬『古活字版之研究』P. 285 和田万吉『古活字本研究資料』P. 514 新日山蔵の印あり 雲村文庫旧蔵 『日光山「天海蔵」主要古書解題』P. 53 輪王寺には同種本八部を蔵す
93	摩尼羅蜜經	一 合				有	京都別院	『高田学報』十五P. 58 33・34・37・38・69・78と合帖現在所在不明 日光市輪王寺に慶長十七(一六二二)年の宗存の写本がある
94	妙法蓮華經(抄)	一 一	元和七 辛酉 一六二二				日光市輪王寺	『日光山「天海蔵」主要古書解題』P. 53 台書籍綜合目録』上P. 278 輪王寺には同種本三部を蔵す 『古文書研究』四P. 113に本書は品釈のことで書名の誤りとある 86の品釈とは別本
95	無垢賢女經	一 一	元和三 丁巳 一六二七			有	某氏 京都別院	『大蔵会展観目録』P. 120 『高田学報』十五P. 57 現在所在不明
96	牟梨曼陀羅呪經	一 一	慶長十九 甲寅 一六四四			有	安城市本證寺 大谷大学 図書館か	『還暦記念日下教授所蔵圖書展観目録』P. 8 楠邸文庫 写真③④ 京都別院旧蔵
97	無量義經	一 一				有	安城市本證寺	『日光山「天海蔵」主要古書解題』P. 53 輪王寺には同種本三部を蔵す
98	無量義經(卷釈)	一 一	元和七 辛酉 一六二二				日光市輪王寺	

番号	書目	巻帖	刊年	干支	西暦	高麗 藏	禿氏 録	川瀬 録	生桑 録	齋藤 録	所蔵	備考
99	無量寿経	二				有					名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』P.102巻下の 駿河御謄本 御本印あり	
100	馬鳴菩薩伝	一	元和元	乙卯	二六五	有					安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.37 写真⑭ 京都別院旧蔵か
101	文殊師利五字瑜伽根本 大智神呪大陀羅尼経	一					〇	〇			京都市広隆寺	『大藏会展観目録』P.37 川瀬録は丁巳となっているが 禿氏録に照し無刊記とするのが正しい
102	文殊師利梵願経	一	元和元	乙卯	二六五	有	〇			75	京都市広隆寺	『大藏会展観目録』P.37 写真⑮ 京都別院旧蔵
103	文殊師利問菩提経	一	元和三	丁巳	二六七	有	〇	〇		41	安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 写真⑯ 京都別院旧蔵
104	維摩結経	二二	慶長十九	甲寅	二六四	有		〇		7	安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 本經の底本は京都市建仁寺両 足院蔵の朝鮮刊本との齋藤説あり
105	預修十王生七経	一					〇	〇		80	某氏	『大藏会展観目録』P.120 本經の底本は京都市建仁寺両 足院蔵の朝鮮刊本との齋藤説あり
106	竜樹菩薩伝	一	元和元	乙卯	二六五	有					竜谷大学 図書館	『大藏会展観目録』P.120 本經の底本は京都市建仁寺両 足院蔵の朝鮮刊本との齋藤説あり
107	老女人経	一	元和三	丁巳	二六七	有		〇		46	安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 本經の底本は京都市建仁寺両 足院蔵の朝鮮刊本との齋藤説あり
108	六字大陀羅尼呪経	一合				有					安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.120 本經の底本は京都市建仁寺両 足院蔵の朝鮮刊本との齋藤説あり
109	六菩薩亦当誦持経	一一	元和元	乙卯	二六五	有	〇	〇	〇	21	京都市広隆寺 大谷大学 図書館か 安城市本證寺	『大藏会展観目録』P.37 写真⑰ 京都別院旧蔵 『還暦記念日下教授所蔵圖書展観目録』P.8 楠邸文庫 写真⑱ 京都別院旧蔵

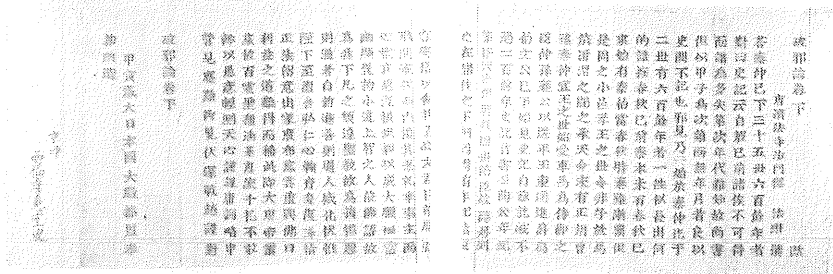


写真 1

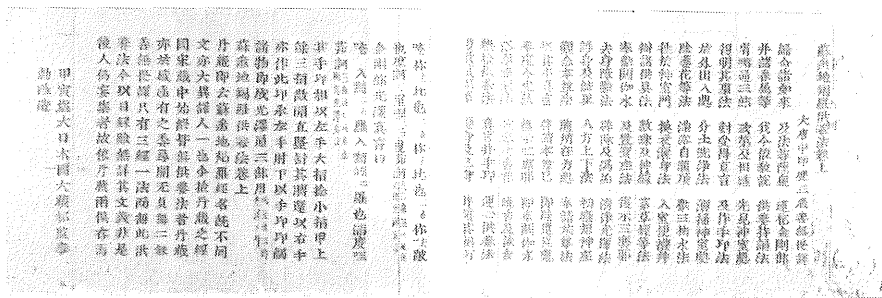


写真 2

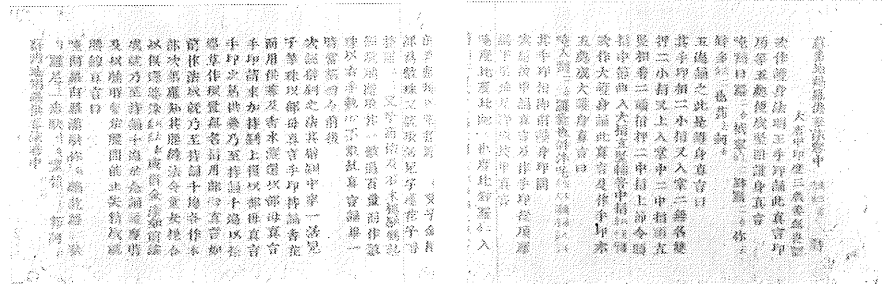


写真 3

[illegible]

写真 4

聖德廣敷 萬民歸仰 功高望重 德被遐邇 功高望重 德被遐邇

写真 5

何大造集說是該時二萬二千八百

Case	Age	Sex	Site	Pathologic	Survival
1	60	M	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
2	65	F	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
3	70	M	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
4	75	F	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
5	80	M	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
6	85	F	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
7	90	M	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
8	95	F	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
9	100	M	Rectum	Adenocarcinoma	10 years
10	105	F	Rectum	Adenocarcinoma	10 years

聖德廣敷 萬民歸仰 功業日新 萬民歸仰

何大造集說是該時二萬二千八百



237  
天  
地  
人  
三  
才  
圖  
說  
卷  
上

[illegible]

說利則世之免刑者豈盡爲善哉  
 御書北門外寺及後園爲之款識曰  
 聖威宏遠神恩永濟萬民期月珠璣  
 寶貨之勝昔乃昔惟茲佛地大皇帝  
 以神聖之靈起人間聖慈起事功德  
 曰此皆吾五世八世諸佛起事功德  
 緣於斯者其後裔當世世供養世世

在僧者改滿經誦頌五令抄奉等此  
 所誦及口誦並手誦經歌樂誦爲佛

住藏

參 大 意 經

新刊

宗存版一切經ノ一ト

写真 10

謝法靈王祠

[illegible]

聞此無作法

總發行所 柯盧白洋行

[illegible]

勸學篇

© 2000 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 247: 395–402

鐵筆銘

[illegible]

初擬生祠碑銘各爲戶部擬撰進稿奉  
 聖覽有劄諭令入直院改撰大憲朱  
 君宏爲總撰各爲戶部擬撰進稿奉  
 聖覽許心經領事爲院篆取錄  
 孫雲龍不設在內伏惟恭謝有爲  
 憲臺公鑑不佞之職方擇得題贊有  
 補刻奇絕通曉雅馴立如標一法防  
 有補刻奇絕通曉雅馴立如標一法防  
 覺院庭集爲大才技乃家成德業  
 紀已碑序并錄至正書平河內尚  
 帶我文政開閣聖阿爲德德德  
 斯德德德德德人非人等甘火  
 雲來未行 謹謹謹謹謹謹謹謹  
 博學與德 謹謹謹謹謹謹謹謹

四  
五  
三

写真 12

龍樹菩薩傳

龍樹菩薩者山南天竺持法者也天  
聰奇辯事不月告在龍樹之中耶滿  
楚志滿四國應各四萬偈有云  
十二字皆風井文而續其義弱屈  
名備於諸國天地理地三國無不受  
滿道指無不悉歸與三人殊是一  
若之得相與戰曰天下理義可以開  
神明暢曲有者吾等處之矣復欲  
何以自娛情極難故策是一生之樂  
滿諸志志上勢非王公何由得之  
惟有隨身之財斯歸可憐四人相視  
莫逆於心俱至僧家求法滿師  
全曰此四君志道各一世竟不辭生  
今以所積財就我此謂是志才明  
絕世所不知諸君此與我共長之  
得必盡我不可凡凡與其難使引

写真 13

馬鳴菩薩傳

有大師名馬鳴菩薩者長壽縣郭子也  
時長壽縣縣令入三寶觀龍地  
出聲聲震動化龍相果云昔見中天  
其有出家外道世世皆善論諸國  
言諸佛止不能與共論隨者可打  
論却非不能不足公焉疑龍人供  
奉時長老馬鳴覺光天竺欲至中國  
地名釋迦國路經犍陀羅昔其戰大  
飽飽老與我宮相持得有持去昔情  
佛德之神不以理甚惡難離其家  
佛德不計諸沙門中常學則者楚其  
隨大與非常人說問其入龍聲則為  
龍則退若而行不難其意也深定不  
肯住細時諸沙門及龍共相視其  
建其不可謂加事龍能者每處於楚  
按老龍即以神力乘虛而過到中夜

写真 14

提婆菩薩傳

提婆者薩婆南天竺人也龍樹菩薩弟  
子感羅門德也持論利便才辯絕倫  
體名天竺為諸國所共推時諸國懷  
服於懷以為所不虛者唯以人不信  
用其言為憂其國中有一大神神貴  
金像之身身長二大身大自在天  
人有求願能令現此如速提婆清南  
來人并見主事者言天便至神人有  
見者既不敢正視又令人退避人者  
百口欲以謗問求顯何顯見現提婆  
言神神德能如安所識乃但令我見  
之昔不如是登是受之所見耶  
人言其志氣於其明王退入廟者數  
千萬人提婆入次廟天降說動其  
耶然目現之者每神走神則神其何

写真 15

馬鳴菩薩傳

馬鳴菩薩者山南天竺持法者也天  
聰奇辯事不月告在龍樹之中耶滿  
楚志滿四國應各四萬偈有云  
十二字皆風井文而續其義弱屈  
名備於諸國天地理地三國無不受  
滿道指無不悉歸與三人殊是一  
若之得相與戰曰天下理義可以開  
神明暢曲有者吾等處之矣復欲  
何以自娛情極難故策是一生之樂  
滿諸志志上勢非王公何由得之  
惟有隨身之財斯歸可憐四人相視  
莫逆於心俱至僧家求法滿師  
全曰此四君志道各一世竟不辭生  
今以所積財就我此謂是志才明  
絕世所不知諸君此與我共長之  
得必盡我不可凡凡與其難使引

馬鳴菩薩傳  
有大師名馬鳴菩薩者長壽縣郭子也  
時長壽縣縣令入三寶觀龍地  
出聲聲震動化龍相果云昔見中天  
其有出家外道世世皆善論諸國  
言諸佛止不能與共論隨者可打  
論却非不能不足公焉疑龍人供  
奉時長老馬鳴覺光天竺欲至中國  
地名釋迦國路經犍陀羅昔其戰大  
飽飽老與我宮相持得有持去昔情  
佛德之神不以理甚惡難離其家  
佛德不計諸沙門中常學則者楚其  
隨大與非常人說問其入龍聲則為  
龍則退若而行不難其意也深定不  
肯住細時諸沙門及龍共相視其  
建其不可謂加事龍能者每處於楚  
按老龍即以神力乘虛而過到中夜

提婆菩薩傳  
提婆者薩婆南天竺人也龍樹菩薩弟  
子感羅門德也持論利便才辯絕倫  
體名天竺為諸國所共推時諸國懷  
服於懷以為所不虛者唯以人不信  
用其言為憂其國中有一大神神貴  
金像之身身長二大身大自在天  
人有求願能令現此如速提婆清南  
來人并見主事者言天便至神人有  
見者既不敢正視又令人退避人者  
百口欲以謗問求顯何顯見現提婆  
言神神德能如安所識乃但令我見  
之昔不如是登是受之所見耶  
人言其志氣於其明王退入廟者數  
千萬人提婆入次廟天降說動其  
耶然目現之者每神走神則神其何



4

者即言我佛解之慈王國之不壞等

會餘國王夢見十事經

此冊本詳悉今且饒舒以待賢指

勅附錄

宗存版一切経ノ一ト

写真 16

10

意去時已無言能止。雖不極盡盡在。

美

[illegible]

写真 17

100

卷之五 文苑類

大日本國以外最大貿易相手  
輸出品

四  
五  
五

写真 18



[illegible]

宗存版一切經ノ一ト

若有眾生曾讀此  
寶經勤修善法盡  
其心者我當為其  
說甚深妙理若如  
來所說經中有一  
毫一釐不充法界  
能達摩尼大智勝  
清淨無垢力功德  
普願念生體悟此

一百五十部佛經

我亦名喚彌勒  
稽首如來稱讚  
寶月快耶由斯  
慈眼親見難離  
覺生凡愚於知  
一行一德竭心  
能達摩尼煩惱  
通斷永證菩提  
永遠凡愚處矣

乙卯歲大日本國大藏卿役左  
勒野吉

四五七

[illegible]

写真 24

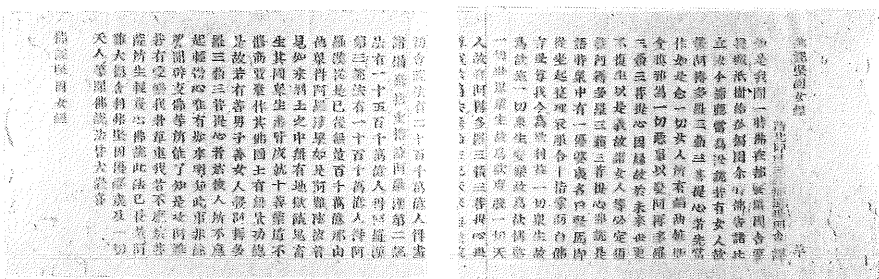


写真 25

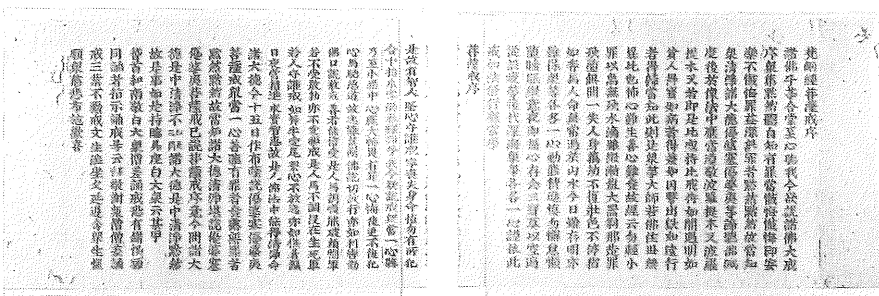


写真 26

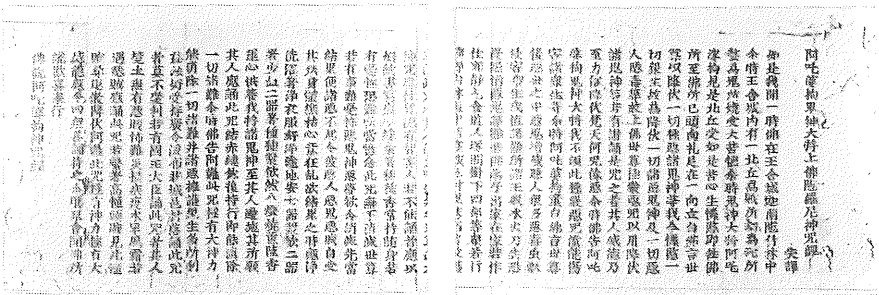


写真 27

[illegible]

宗存版一切經ノ一ト

[illegible][illegible]四  
五  
九

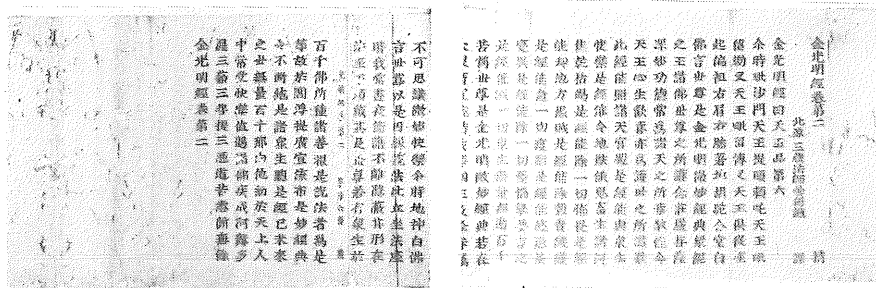


写真 31

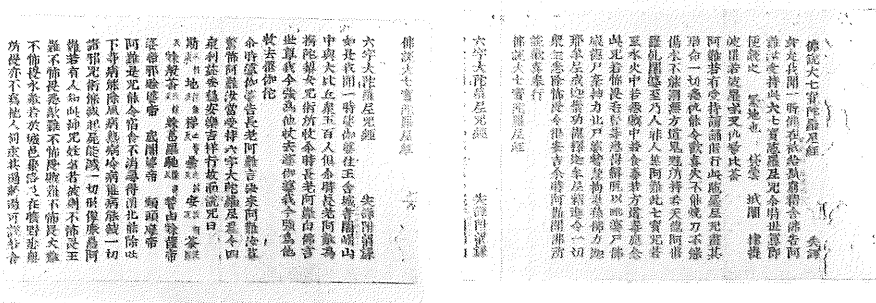


写真 32

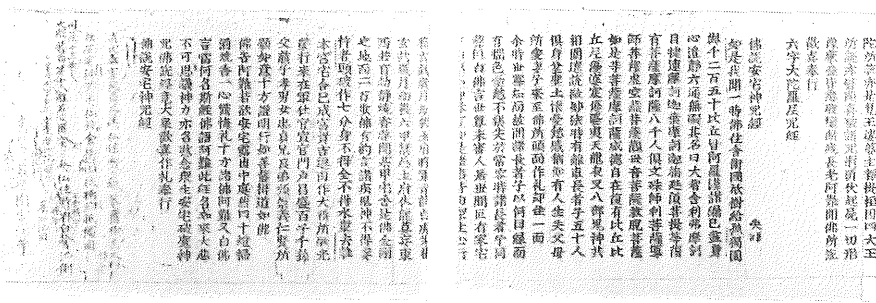


写真 33

三聖前七十餘里地名不遠矣其地  
積石山脈之西上望惟積石之波白河奔奔  
最宜驅馳之輩大驅犢牧豕爲戲取資自  
賄縣衙內校吏胡雅三明之弟思爲人五  
所轄者盡聞胡雅三 胡雅三弟家誠有  
流布骨 然雅三之弟得官報知之其地  
切不足一觀之時亦用胡雅三之弟思爲  
擬持其與之半成而胡雅三之弟思爲大  
道所有十八共中夫一議云 爲去歸於西大

[illegible]

0000-0001-9151-2019

丁巳秋日本國大藏寺藏

0000-0001-9300-3000

写真 34

有大成應付得濟及諸儒履尾歸陳  
三昧及諸神通文殊師利菩薩觀世  
音普賢大覺至善諸尊為普應無量  
菩薩前智行菩薩以及上首如是等  
諸佛大聖十萬億那由他諸佛所  
天說及文殊聖尊等皆能遊涉無量  
那由他處作佛人非入夢大夢國  
余群皆尊入諸聖無量三昧如實者  
應正法性如實者不念代理則實者  
應正法性如實者不智智慧如實者  
應正法性如實者不說說如實者

[illegible]

均

写真 35

從問所來去至何所死從提問所來去  
至何所處也雖慈惠觀生死識得何處  
來去至何所地耳豈口舌一提而得來  
去至何所地乎夫最宜提問所來  
去至何所語言善哉固是大快生誠  
吾師語矣云爾語乃無所復答云法  
華經云病癒所從來去亦無所至  
意者猶疑未決又云無至也論諸家  
起於死後歸附冥家其然附附至理  
耳且心身已無所從來去味斯所至

[illegible]

10

100

22

100

10

写真 36





卷之六

卷一

窮源

1536-2607-01-0

卷之五

子丑月二

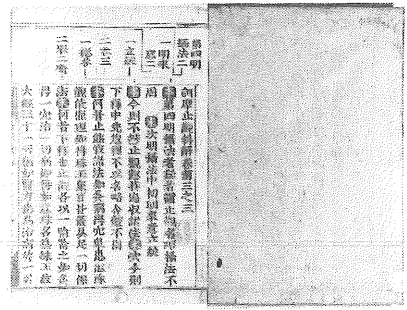
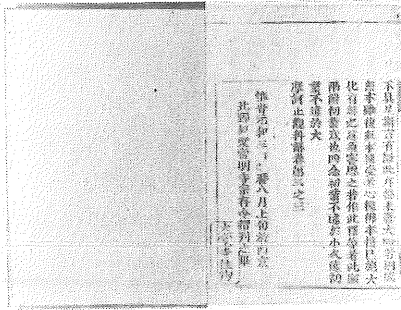


写真 42

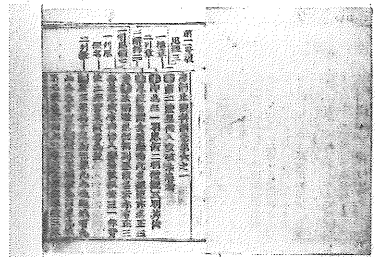
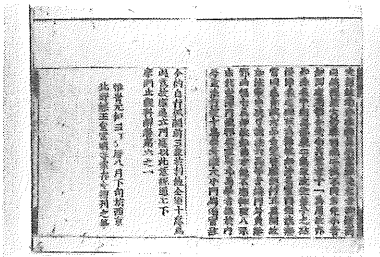


写真 43